季刊

弥生の出雲王に出会える

# 出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOI NOMORI MUSEUM

よすみちゃん

第12号 (2014年1月)

## ★ミニ企画展

**3月1日（土）～5月12日（月）**

**「ふるさと出雲お宝展 Ⅱ ―小中学校編―」**

**【観覧無料】**

ウミネコの剥製

出雲市内には、実はあちこちに貴重な歴史文化資料が大切に保存・展示されています。

これらの資料（「お宝」）を一人でも多くの市民の方々にご覧いただきたく、２０１２年に、コミュニティセンターに収蔵される資料を集めて展覧会を開催したところ、とてもご好評をいただきました。

そこで、今回は小・中学校に保管されているものの中から選りすぐりの逸品をお目にかけます。

展示品には、著名人ゆかりの品や、卒業生から寄贈された珍品、地域ならではの特産品などもあります。中には「なぜ学校にこんなものが！」と驚くようなものも。

もちろん、昔の教科書や文具の展示も行います。子供時代を思い出して、今のノートや筆記具と比べてみていただければと思います。

母校の展示品を懐かしむもよし、普段はなかなか見る機会のない他校の逸品に目を見張るもよし。ご家族あるいは同級生でお誘いあわせのうえ、ぜひ、お出かけください。

（安部　百合子）

明治時代の学校用品と簪（かんざし）

## ★ギャラリー展示

**2月19日（水）～6月2日（月）**

**斐川地域の横穴（よこあな）墓**

**【観覧無料・乞うご期待！】**

出雲市は、斐川町直江の工業団地予定地で発掘調査をしています。調査では、山の斜面に穴を掘った横穴墓15基からなる杉沢横穴墓群を見つけました。これらは、およそ１３５０年前の集団墓地です。

ところで、今から30年前にもここから北に７００ｍの場所で横穴墓群が調査されています。それは、19基が見つかった平野横穴墓群です。

この２つの横穴墓群が営まれた丘陵は、今は江戸時代に掘られた旧新川の河道で南北に分断されていますが、それ以前は一続きだったと思われます。

同じ丘陵地に墓を造った人たちは、どこで暮らし、どのような関係にあったのでしょうか。出雲平野の他の横穴墓との共通点や相違点を明らかにしながら、当時の地域社会について考えていきたいと思います。

（原　俊二）

★特集　研究ノート⑫

開催中～2月17日（月）

ギャラリー展

## 土師器の底を削る意味とは？

### 「神門寺発掘30年」より

神門寺は出雲市塩冶町にある浄土宗（元は天台宗）の寺院です。寺の境内やその周辺では古代瓦が採取され、境内に礎石が残ることなどから、古くから古代寺院の遺跡として注目を集めてきました。

寺の境内の発掘調査が行われたのは、今から31年前の昭和57年（1982）～昭和59年（1984）のことです。その後、寺の東側や北側の調査も行われました。

今回は、発掘調査から30年が経つのを機に、神門寺境内やその周辺からの出土品を展示し、神門寺の歴史を紹介しています。

ギャラリー展のようす

神門寺の発掘では、古くは縄文時代から近現代に至るまでの品々が見つかっています。特に『出雲国風土記』に記された「新造院」に関連して、古代の品々が注目されることが多いのですが、今回は中世（鎌倉から戦国時代）の品々に注目します。

中世の神門寺は、塩冶氏、尼子氏、毛利氏など、出雲平野を支配した一族や戦国大名の保護を受けました。こうしたことから、神門寺は当時の優れた文化の窓口になったと考えられます。寺に伝わる『庭訓往来』（重要文化財）などは、その一端を示しています。

神門寺の発掘では、底と底の外側の角を削り落とされた戦国時代の「かわらけ」（土師器の皿）が見つかっています。これらは、底が丸みをもつ京都系土師器をまねたものと考えられます。

京都系土師器は、一つの盃で一献、二献と酒を飲み交わすことによって、お互いの関係を確認する儀式で用いられました。こうした儀式は初め京都・室町幕府の将軍家で行われましたが、次第に各地の戦国大名が取り入れ、全国に広まっていきます。江戸時代初めの記録には、鰐淵寺僧が正月に北島国造家で、この儀式を行う様子が記されています。本来武家の儀式とされますが、僧侶の間でも行われていたようです。

出雲国では、尼子氏がこの儀式を導入したため、儀式の本場である京都の作り方に近づけた土師器が、月山富田城跡や松江などの出雲東部を中心に見つかっています。

一方西部では、平田、大社、加茂など当時の斐伊川右岸で見つかっていますが、左岸の出雲平野での出土例はなく、京都系土師器の空白域となっています。その空白域で見られるのが、神門寺でも出土した底が削られた土師器なのです。

矢野遺跡で見つかった底が削られた土師器の内側の中央には、月山富田城跡出土の京都系土師器にも見られる円形の窪みが見られます。この窪みは本場の京都系土師器の窪みを真似たもので、このことは、底が削られた土師器が外形だけでなく、内側も京都系土師器に近づけようとしたことを示しています。まさに都ぶりへの憧れが込められていたと言えます。

底が削られた土師器（矢野遺跡）

それではなぜ、斐伊川左岸の出雲平野で、京都系ではなく、底が削られた土師器が見られるのでしょう。その背景の考察については今後の課題ですが、京都系を尼子氏が導入したことから、出雲平野に拠点を置いた塩冶氏との関係をみることができるかもしれません。

さらに、京都系土師器が導入された時に、出雲だけでなく、越中（富山）や越後（新潟）でも底が削られた土師器が出現します。日本海の東西で同様の土師器が見られることも、たいへん面白い現象です。

今まで注目されなかった土師器ですが、その研究を通して、当時の社会の一端が見えてくるのではないでしょうか。

（髙橋　周）

## ★発掘調査の現場から⑨

### 「越堂たたら跡の発掘調査」

市文化財課では、11月から国史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の内容確認調査を実施しており、越堂たたら跡の発掘調査を開始しました。

越堂たたらは、田儀櫻井家によって江戸時代から明治初期にかけて長期間経営されました。出雲市多伎町口田儀に所在し、海辺に立地しているのが特徴的です。そのため、越堂たたらでは、製鉄の原材料の調達から製品の搬出まで、海運を利用する方法をとっていたと考えられます。

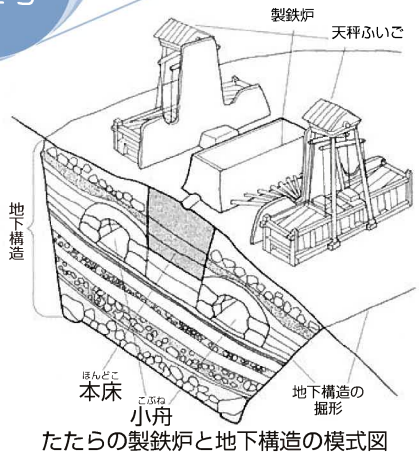
平成17年に越堂たたら跡の残存状況を確認するため、最初の発掘調査を実施し、その調査では、製鉄炉の床釣り（湿気と温度低下を防ぐ地下構造施設）の上部にあたる本床や小舟を一部確認しました。

これにより残存状況が明らかとなり、平成21年には聖谷たたら跡（多伎町奥田儀）とともに国指定史跡となりました。

今回は、前回本床と小舟の一部が確認できた場所の北側に調査区を設定しています。これまでに、本床の北側の広がりや、小舟の規模を確認できました。これらは、後世の宅地造成によって一部壊されていますが、比較的よく残存しており、たたらの地下構造を詳しく知ることができます。

発掘調査は、今年度から来年度にかけて実施する予定で、今後の進展に是非ご期待ください。

（石原　聡・幡中光輔）



たたらの製鉄炉と地下構造の模式図

越堂たたら跡の発掘調査状況（南から）

## ★発掘調査速報展

### 1月8日（水）～3月10日（月）

### 「出雲大社境内遺跡の成り立ち」

出雲大社の境内は「出雲大社境内遺跡」と呼ばれる遺跡です。このため、遺跡に影響を及ぼす工事が行われるときは、事前に発掘調査を行っています。昨年は、神祐殿前で予定されている収蔵庫建設に伴う発掘調査を行いました。

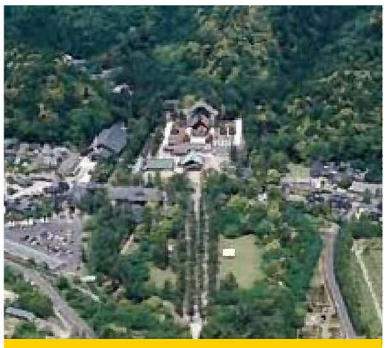
この調査では、中世土師器などたくさんの土器が出土したほか、文化6年（1809）の遷宮に際して使用された仮設建物跡と考えられる遺構も見つかっています。また、約1mの深さまで掘った調査地の土層を観察すると、興味深いことが明らかとなりました。

土層は大きく3層に分けられ、上から順に、江戸時代以降の造成土層（Ⅰ層）、海浜または砂丘の砂の二次堆積層（Ⅱ層）、中世の土石流の層（Ⅲ層）であることが分かったのです。

北山山麓にある出雲大社は三方を山に囲まれており、境内となる地盤は、かつて、西の素鵞川と東の吉野川の扇状地が発達することで形成されていきました。調査地で行ったボーリングでは、少なくとも18mの土砂が堆積していることが確認されています。

今回の調査で見つかったⅢ層は、吉野川の土石流による堆積と考えられます。中世（500年前頃）までは境内地で土石流が繰り返し発生していたことが分かりました。Ⅱ層は、水によって運ばれてきた砂であることが判明しています。このことは境内地の広範囲が水没するような水害にあっていたことを物語っています。このような水害を防ぐため、江戸時代以降に現在の地面近くまで人為的に造成が行なわれ、Ⅰ層が形成されたと考えられます。

土器や遺構のみならず、発掘調査地の土層も私達に多くの事実を伝えてくれます。（三原一将）


三方を山で囲まれた出雲大社の境内地は、側を流れる川により形成された

## ★講座のご案内

### ▼出雲市文化財保護審議会委員講座

**「出雲の文化財Ⅳ」**

文化財のプロである出雲市文化財保護審議会委員が、その専門分野から出雲の歴史を語ります。

**2月22日（土）**
**「出雲の自然のみどころ、あれこれ」**
【講　師】佐藤　仁志氏
（島根大学非常勤講師・樹木医）

**3月8日（土）**
**「御遷宮とは何か～出雲大社『平成の大遷宮』に学ぶべきこと～」**
【講　師】錦田　剛志氏
（島根県神社庁参事）

**3月22日（土）**
**「長州戦争と神門郡」（仮）**
【講　師】岡　宏三氏
（県立古代出雲歴史博物館　専門学芸員）

右の講座はいずれも
●時　間　14時～16時
●受講料　３００円
●定　員　80名
（事前にお申し込みください。）

## ★イベントのご案内

### ▼古代出雲歴史探訪　ミステリーウオーク

**3月21日（金・春分の日）**
※雨天決行

●出雲の文化遺産を訪ね、地域の歴史を学びながら体力づくりも目指すミステリーウオーク。

今回は出雲弥生の森博物館をスタート・ゴールとし、四隅突出型墳丘墓（西谷墳墓群史跡公園）・今市大念寺古墳・上塩冶築山古墳などを巡る約11キロのコースです。ゴール後、「ミルクすいとん」のサービスがあります。

・階段や坂道が含まれますので、ご留意ください。

●集合　出雲弥生の森博物館
●受付　８時30分～９時30分
●参加料　５００円
（高校生以下　１００円）
●携行品　箸とお椀、帽子、水筒、タオルなど（雨天時は雨具）
●定員　３００名
●締切　３月７日（金）
※お申し込みは当館まで。参加料は当日お持ちください。

## ★館長コラム⑧

ミステリーの女王アガサ・クリスティーは、「考古学者は女性にとって最良の夫だ」という名言（？）を残しました。それは、「妻が年を取れば取るほど（つまり古くなるほど）、夫は関心を持つようになるから」だそうです（！）。

周知のように、彼女はオリエント（西アジア）考古学者のマックス・マロワンと再婚し、ご主人の発掘にはしばしば同行しました。

クリスティーが亡くなった１９７６年、たまたま私は発掘調査のため西アジアに出張しました。テヘランで見た新聞は、クリスティーの特集を組んでいました。

イランでは、電気も水道もない弥生時代のような山奥の農村で、二カ月近くを過ごしました。このとき無聊を慰めたのが、クリスティーの本でした。日本から送ってもらった段ボールいっぱいの文庫本の中に、クリスティーの作品がたくさんあったのです。

イラクでは発掘の合間に、マロワンが調査した諸遺跡や、夫妻が定宿にしていたバグダードの超豪華ホテルを見物したりしました。

このように西アジアでの発掘の思い出は、私の中ではクリスティーと強く結びついています。ただ気がかりなのは、調査中に仲良くなった現地の人たちが、その後の動乱の時代をどのように過ごしたのか、ということです。

ところで冒頭の「名言」ですが、クリスティー自身は、そんなことを言った覚えはないと否定しています。出どころはマロワンのようですので、ただの「のろけ話」だったのかもしれません。

**（発行）出雲弥生の森博物館　2014年1月**

〒693-0011　島根県出雲市大津町2760
(TEL)0853-25-1841　(FAX)0853-21-6617
(e-mail) yayoi@city.izumo.shimane.jp
http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

●入 館 料 ／ 無料（特別展等観覧料を除く）
●開館時間 ／ 9:00～17:00（入館は16:30まで）
●休 館 日 ／ 火曜日（祝日の場合は翌日）